

より良い社会のための仕事と私事

What Do We Work for ?

田辺恒彰 Tsuneaki TANABE

先日、家内の実家に向かって高速道路を運転中、家内が「いけない、お財布を忘れてきちゃった」と言いながら、携帯電話を取り出して、ご近所のMさんに電話をかけた。「Mさん、悪いけどお財布を忘れてきちゃったので、家のお財布からクレジットカードだけを取り出して、私の実家に送ってください」。すぐにMさんのお嬢さんが数キロ離れた郵便局に行き、速達書留で送ってくださり、翌日には受け取ることができた。Mさんは、私の家の鍵をもっており、財布の置き場所も知っているわけである。このような出来事は私の住んでいる地域ではよくあることで、本当に幸せな地域社会に住んでいるとありがたく感じている。20年かけてすばらしい地域社会をともに築き上げたご近所に感謝している。

先日、知り合いのドイツ人と、ドイツや日本は豊かになったが、その結果、若者や社会が荒廃して幸せ感はなくなってきたというような話をした。世界で一番幸せな国はブータンだとか北欧だとか言われているが、このような国に共通しているのは地域社会がしっかりしていることであろう。ブータンでは地域社会なしには生活できないし、北欧では冬に移動がしにくいので必然的に地域社会のウエイトが高くなる。

本欄は「仕事と私事」というコラムであるが、辞書によると、仕事とは生計を立てるために従事する勤め、私事の対義語は公事とある。日常の諸活動とその目的を考えてみると、仕事＝収入、地位を得るため、地域活動＝安定した地域社会を築くため、家事＝快適な生活をするため、育児＝次世代を担う人を育てるためであり、「仕事」と家事は個人的な目的のための活動(＝私事)で、育児や地域活動が公事となる。仕事と育児家事の両立が話題になることが多いが、良い地域社会を築くための活動(地区会、生涯学習、PTA、地区消防団…)も配慮してバランスを考えるべきだと思う。

女性が結婚後に「仕事」をしやすくする仕組みが議論されることがあるが、少なくとも私が勤務している会社では「制度」としては、女子社員からも大きな不

満はない。人事の人によると、弊社が特別ではなく、法律を守ればこの程度の制度にはなるとのことなので、コンプライアンス意識のある会社ではどこでもそうであろう。しかし、日本ではわずか50年前には「職業婦人」が奇異の目で見られていたわけであって、実際の運用は簡単ではないと思う。実際弊社でも、男性の育児休暇取得者が少ないのが人事の悩みの一つのことである。しかし、筆者らの親の世代、筆者らの世代、子供の世代での意識変革は非常に大きなものであり、あと20年もすればこのような議論がまったく無意味な日本になっているかもしれない。

地域活動や育児に時間をかければ、通常の意味での仕事をやる時間が減るのは当たり前であるが、このバランスをどうとるかは社会や制度の問題ではなく、歴史背景や男性の意識の問題だと思う。どの活動も必要かつ重要なものであって、すべてをバランスよくこなすのは世帯としての責任である。これを夫婦でどう分担して(可能であればおじいちゃんとおばあちゃんの協力を得つつ)うまくこなしていくかという夫婦問題であり、まさに「男女共同」の作業だと思う。

日経ビジネスの2010年10月4日号にスウェーデンに本社のあるH&M社の日本法人社長(女性)の話が載っていた。11月に第2子出産で、半年の育児休暇をとる予定だが、本社CEOからはほかの人にとってもいいチャンスになるから1年でも1年半でも休みなさいと言われたとのことである。スウェーデンでは夫婦ともに働くのが当たり前なので「主婦」がいないこと、男性でも1年くらいの育児休暇を取ることで、ママ友ならぬパパ友ができること、子育てという経験が仕事でも活かせるキャリアと考える文化があることなど、日本とのギャップを感じさせる記事であった。

みんなが幸せになるための日本女性の社会進出については、お手本とする諸外国の歴史や社会的背景、仕事に対する考え方をよく勉強して参考にする必要があるだろう。



田辺恒彰 Tsuneaki TANABE

旭化成イーマテリアルズ(株) 新事業開発総部
工学博士。
専門は高分子材料。
E-mail: tanabe.tk@om.asahi-kasei.co.jp